新収の中世歌書四点

酒井 大雄

太神宮法楽百首（「市還忠百首」）

酒井 上宗幸

近年、本学中央図書館特別資料室に収蔵される藤原定家に依託された歌謡の
一軸で、鎌倉時代末期の成立でされている。以下紹介する

酒井 大雄

一、酒井 大雄

鶴鶴系書庫と呼ばれる藤原定家に依託された歌謡の
一つで、鎌倉時代末期の成立でされている。以下紹介する

酒井 上宗幸

早本は、冷泉家系統の一冊と考えられる。

酒井 上宗幸

列挙は、冷泉家系統の本とされる。以下紹介する

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ

酒井 上宗幸

えよ
日影をもまたてぞみる有明

ひかどともにゆるは坐

は、『市長忠書』や『遅報院御点書』には、「日か

けをやまて消ゆく明のひかどともにゆるは坐

露」と、実隆が訂正した形で取れているのである。

なお三例の場合は、句を添削した歌に点が付されている

全体の発想を評価してのものと思われる。批評の仕方と

しては配慮に満ちた感があり、実隆の態度を知る上で興

味深い事例といえよう。

以上、本書は、市長忠が天文三年春夏頃、伊勢神宮

奉納のため詠じた自釈に、三条西叅が批評を加えた原

本と考えられる。そして、本書をこの一部として、市

忠の白書や『遅報院御点書』が編まれていった過

程も明らかになる。忠の膨大な評章群の整理は今後の

課題だが、その際本書は重要な情報提供するものと

思われる。また、実隆の批評態度が窺われる点も貴重で

ある。

作者の市長忠は、明応六年（四九七）年、天文四年

（四五三）没。四九七、即、和の豪族で十三都を本拠とす

る十三氏の人。和歌に傾いた戦国武将の典型と言え

る。前述のように、伝承する誤章は稀少数である（な

お本書には、市長忠の三十篇自釈をつけて『図書紀要』四

巻上に収録されている。）、「九九七・三」その他『花集』や『清雑集』をはじめ、

多くの歌を本書に収めた功績は大きい。

（小林大輔）

付記 本稿の作成に当たり、雅 Illustrated本を御提供を得た。感

謝の意を表したい。

（いのえ もね）

早稲田大学名誉教授

早稲田大学文学部文学研究所教授

（さかい しげゆき）